



巻頭言

筑波大学における特別支援教育に係る使命の自覚と行動に期待する

筑波大学人間系教授

安藤 隆男

筑波大学特別支援教育研究センター（以下、研究センターとする）は、2007年4月から特別支援教育への制度転換されることに先立ち、2004年4月、筑波大学の特別支援教育の学術研究の拠点である心身障害学系と、実践研究の拠点である附属特別支援学校との機能を融合し、わが国における『特別支援教育に関わる新たな知の創成と発信』を使命として、東京キャンパス文京校舎に設置されました。14年後の2018年3月、研究センターは大学の方針で幕を閉じることとなったのは周知のことです。現在、研究センターの担った機能は、研究と事業に仕分けされ、前者を障害科学域（リサーチ・ユニット）が、後者を特別支援教育連携推進グループが、それぞれ引き継ぐこととなりました。

ここでは、2004年8月から2012年3月の間、研究センター教授として籍を置きつつ、附属桐が丘特別支援学校長を兼務した経験から、研究センターの実績について個人的な見解を述べるものです。今後、あらためて筑波大学が特別支援教育にどのようにコミットするのかを考えるきっかけになればとのおもいからです。

まず、学内における実績をあげます。特別支援教育研究センターの設置以前は、学系と附属学校、そして附属学校間の組織的な研究交流は一部を除き、ほとんどなされていませんでした。研究センターの立ち上げは、歴史や組織文化等を異にする学系、各附属学校をしてそれぞれの特性を生かした協働の在り方に気づきをもたらしたといえます。そのエネルギーは附属学校教育局を加えた特別支援学校の将来構想の議論へと架橋することになりました。とりわけ、各附属学校での実践知を集約した重複障害教育に係る実践研究を担う部門の設置構想は、それまでの附属学校の歴史の上で、画期的であったといえます。構想は結果として結実しませんでした。構想に至った議論は先につながるものと考えます。

次に、学外における実績です。研究センターの機能の一つに現職者研修機能がありました。各県から派遣された現職教員研修生は、1年あるいは半年にわたり、研究センターでの講義・演習、附属学校での実習に臨みつつ、研究センター教授の指導の下で研修課題の取りまとめを行いました。筑波大学の特別支援教育に関わる諸資源を活用して特別支援教育に係る専門性の深化を図り、地域・学校におけるリーダー的人材の養成を目的とするものです。修了生の多くは、現在、各県の教育庁指導主事や特別支援学校の校長・教頭などの要職に就いています。彼らは筑波大学における特別支援教育研究の理解者となるのです。

研究センターの機能を引き継いだ現組織はあくまで仮の姿でしかありません。機能を分断された組織は、これまで以上のパフォーマンスは望むべくもなく、メンテナンスもむずかしい状況といえるでしょう。リサーチ・ユニットと連携推進グループに代わる新たな協働のスキームの構築が求められる時といえます。研究センターが培った実績を振り返り、ステークホルダーとのコミュニケーションを通して、筑波大学における特別支援教育に関わる個人や組織は、自らの使命の自覚とこれに基づく行動を期待するものです。



現職教員研修の修了式を行いました【報告】

本年度研修員の北海道新篠津高等養護学校・八木郁朗教諭は、附属大塚特別支援学校、並びに、東京キャンパスを中心とした1年間の専門性向上研修において、特別支援教育に係る様々な事項の研鑽を積み、自身の実践知の更なる深化を追究してきました。

八木先生は、研修テーマを「知的障害特別支援学校の授業における動画支援教材の効果的な活用方法について」と設定し、附属大塚特別支援学校高等部を実践知深化のフィールドと定め、授業実践とその検証に取り組みました。昨今は、ICT機器を有効に活用することで、一人一人に最適化された教育活動を展開することが求められており、特別支援教育においても、これまで以上に充実した実践が期待されています。八木先生はこうした動向を踏まえつつ、これからの教育活動における所属校の課題とこれからの展望を礎にした仮説を立て、知的障害児が意欲的に学ぶことができるデジタル教材とそれを用いた指導の在り方についての検討として、「主観視点動画」を用いた指導方法の開発を到達点にした実践と検証に取り組みました。

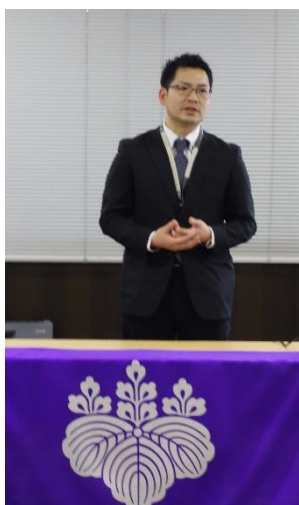
また、多忙な研修期間において、専門の知的障害教育以外の研究・実践についても幅広く学ぶことを怠らず、つくばキャンパス、各附属特別支援学校での演習や参観、あるいは、関東及び近郊の公立特別支援学校、ICTや教育に関するイベントへも積極的に参加し、充実した時間を重ねてきました。なかでも、筑波大学人間系と附属学校11校により構成されるプロジェクト研究へ、積極的に参画しました。八木先生が所属したのは、プロジェクト研究4「ICTを活用した授業実践の共有と公開」であり、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校、大学と様々なフィールドにおいて実践を重ねるメンバーとともに、これからの学校教育において有用なICT機器とその活用の在り方について議論を重ねました。その成果は、2月22日（土）に開催した筑波大学附属学校教局主催の研究発表会において「動画を使った授業実践」として報告がなされました。そして3月5日（木）、1年間の研修成果報告、並びに、修了式の日を東京キャンパスで迎えました。成果報告においては、「主観視点動画の特質は生徒の意欲を高める効果であり、授業の導入期において有効である」「動画を教材とすることによる教育的効果を最大限に生かすための授業づくりの視点が必要」の2点について報告しました。修了式では、附属学校教局教育長補佐・雷坂教授より、「動画支援教材による実践の第一人者として活躍してほしい」と今後への期待を込めたメッセージが贈られ、これに対して、八木先生は「多くの出会いから得たものを新篠津での実践に生かしたい」と所属校へ戻ってからの抱負を語りました。

研修における成果を礎に、これから繰り広げる実践によって、北の大地に大きな花を咲かせください。



研修成果報告会において報告する八木教諭（上）

研修成果報告会を終え、会場及び遠隔配信先の参会者と記念撮影（下）



充実した1年を振り返りながら4月からの抱負について語る八木教諭

筑波大学発「オリンピック・パラリンピック教育」

今年（2020年）開催のオリンピック・パラリンピックという世界的スポーツのイベントをきっかけに、共生社会の実現に向けたスポーツ交流が徐々に盛んになっています。本学では、以前より人間の尊厳や人類の平和の理念に基づいた「オリンピック・パラリンピック教育（オリ・パラ教育）」に力を注いでおり、附属学校においても様々な実践が展開されています。SNE-Tでは、各校の取り組みの一端を紹介します。



その4 附属視覚特別支援学校の実践

東京オリンピック・パラリンピックの開幕まで200日を切り、学校内外で機運の高まりを感じます。2020年1月にはパラリンピック競泳男子日本代表として合計21個のメダルを獲得したレジェンド・河合純一氏（1993年度本校高等部普通科卒）が日本パラリンピック委員会の委員長に就任し、日本代表選手団団長として大会成功に向けご尽力されています。本校では年間を通して小学部から高等部専攻科まで、幅広くオリ・パラ教育に取り組んでおり、とりわけ本校中学部、高等部普通科・音楽科では日常的に体育実技や運動部、総合的な学習の時間や学外でのスポーツ活動等を通じ、実践を行っています。

○本校卒業生、在校生の活躍 - 東京パラリンピックに向けて -

卒業生の中には本校に在籍していた当時、体育実技や運動部活動などを通じて競技の魅力や楽しさを知り、勝つ喜びや負ける悔しさを経験して競技に打ち込むことを決意したパラアスリートが多く存在しています。

東京パラリンピック出場内定が発表されている選手(2月20日現在)

(卒業年度・学部科/性別/種目/クラス/夏季大会出場歴)

【陸上】

堀越 信司（2006年度高等部普通科卒/男子/マラソン/T12/北京・ロンドン・リオ）

高田 千明（1999年度中学部卒/女子/走り幅跳び/T11/リオ）

【水泳】

木村 敬一（2008年度高等部普通科卒/男子/100m バタフライ/S11/北京・ロンドン・リオ）

【ゴールボール(女子)】

天摩 由貴（2008年度高等部普通科卒/女子/ロンドン*1・リオ）

*陸上競技（女子100m・200mで出場）

若杉 遥（2013年度高等部普通科卒/女子/ロンドン・リオ）

また、在校生にも東京パラリンピック出場に期待のかかる選手がいます。高等部普通科1年の園部優月くんです。園部くんはブラインドサッカーを小5から始め、2016年度に本校中学部へ入学し、以来本校を拠点に活動する free bird mejirodai で競技に打ち込んでいます。中2で日本代表強化指定選手に選出され、昨年9月のアジア選手権（タイ）では、日本代表メンバーに選出されました。今回、日本はパラリンピック初出場となりますが、園部くんがその代表メンバーにも選出されるかも注目です。（山本 夏幹）



2019 アジア選手権にて
(提供: 日本ブラインドサッカー協会/
鰐部春雄)



下段左から3番目が園部選手



相手を突破しシュートする園部選手
(提供: 日本ブラインドサッカー協会/鰐部春雄)

3.22 (日) 教材・指導法に関する書籍を刊行【お知らせ】

筑波大学附属特別支援 5 校で実際に使用されてきた教材や指導法について取り扱った書籍をジェアース教育新社より刊行されます。

『授業を豊かにする 筑波大附属特別支援学校の 教材知恵袋・教科編』

(筑波大学 特別支援教育 教材・指導法データベース選集 1)

本書に掲載した教材や指導法は、特別支援教育連携推進グループが、附属特別支援 5 校、人間系障害科学域と協働して構築・運用している「筑波大学 特別支援教育 教材・指導法データベース」において一般公開されています (<http://www.human.tsukuba.ac.jp/snerc/kdb/index.html>)。

なお、本データベースはスマートフォンでもご覧になれますので、以下の QR コードを読み込んでみてください。



附属特別支援学校 5 校・特別支援教育連携推進グループ・人間系障害科学域の協働による
筑波大学 特別支援教育 教材・指導法データベース



附属特別支援学校 5 校・特別支援教育連携推進グループの催し

- 5 月 23 日 (土) ・ 9 月 12 日 (土) 公開講座「特別支援教育における子どもの見立てと教材・指導法の基礎」 [東京キャンパス文京校舎]
8 月 18 日 (火) ～ 21 日 (金) 免許法認定公開講座 [附属中高桐陰会館：東京都文京区]

※3 月 24 日 (火) 開催予定としておりました **第 2 回特別支援教育研究セミナー** は、新型コロナウイルス感染症が拡大している状況を受け、参加者及び関係者の健康・安全面を第一に考慮した結果、**開催中止** を決定いたしました。

※公開講座「特別支援教育における子どもの見立てと教材・指導法の基礎」は、特別支援教育経験 5 年未満の先生方を対象にした講座です。5 月は子どもに応じた教材・指導法について協議し、その内容を基に教室で実践を重ねた後、9 月にフォローアップの講座を行います。

※免許法認定公開講座は、東京オリンピック・パラリンピック開催に伴い、交通機関の混雑や宿泊先の確保が困難となることから、**第 3 欄 (障害児の心理・生理・病理・教育課程・指導法論) のみ実施** します。なお、令和 3 年度は通常通り、第 1 欄・第 2 欄・第 3 欄の開講を予定しています。

※公開講座は筑波大学ホームページから 3 月より申し込みができます。

詳しくは (<https://www.tsukuba.ac.jp/education/extension/>) にてご確認ください。

編集後記

子どもたちを感染症から守ることを第一に考えなければならぬ時です。感染拡大を回避し、4 月には充実した新学期を迎えたいところです。お送りした情報が先生方の教育活動のヒントになるよう励んで参ります。次号は新年度 6 月頃を予定しています。

発行：筑波大学特別支援教育連携推進グループ
(社会貢献準備会)

112-0012 東京都文京区大塚 3-29-1
TEL : 03-3942-6923 FAX : 03-3942-6938
<http://www.human.tsukuba.ac.jp/snerc/>
mail : snerc@human.tsukuba.ac.jp